

近代日本における「公平」観の転換

大川 清 丈

一 はじめに

この小論では、日本における社会意識の変動を「公平」(Fairness) に対する見方、すなわち公平観という切り口によって分析する。なお、ここでの主な関心は、日本社会における社会変動をいかに社会的に説明するか、にあり、そのひとつのケース・スタディとして「公平」というテーマを取り上げている。

二 「公平」の概念

「公平」という言葉が用いられる領域は数多くあるが、その代表例として税金、教育、スポーツなどが挙げられる。そこでこれらの場面を思い浮かべながら、J・ロールズの分析を参照する。ロールズによれば、公平概念では、相互に相手を人格として認め合うこと、すなわち「人格の相互承認」が前提とされる。また、税金の分担などでは、受け取った利益に応じて負担すべきであるという考え方、すなわち「応分の負担と報酬」が公平な配分にある。さらに、教育などでは、公平な選抜として「機会の均等」が要求される。

この公平概念の図式を踏まえて、日本社会において何が「公平」なのか、の基準の変化を通して、公平観の転換について考察していく。なお、ここでひとつの反論が予想される。すなわち、

欧米に比べて日本は「アンフェア」な社会であるといわれている。本稿では、あらゆる社会では、そこに秩序が成立しているからには、それ自身の「公平」観があり、ある社会から他の社会を見れば、それが「不公平」に見えることがありうる、との立場をとることにする。

三 労働運動に見る「公平」観の変動

R・P・ドーアは、『日本の農地改革』において、法的基盤や経済的依存関係といった制度次元での変化と関連づけながら、農地改革の前と後とで農村社会における公平観が変わったことを示した。例えば、戦後になってから、地主が小作から戦前と同様の高率小作料を取り立てることは、不当である、と考えられるようになった。地主—小作関係は、より平等主義的な方向に変化したのである。

ドーアによる分析は、戦前と戦後の間に公平観の転換があったことを意味するが、近代日本でこの時以外に転換期がなかったのだろうか？ そこで労働の領域において大正期にひとつの転換期があったことを、以下で論じていく。

考察方法としては、「労働者」——当時は「職工」と呼ばれることが多かった——に焦点を合わせ、彼らの置かれた状況、および彼らが「労働運動」において何を目指したのか、について検討する。資料としては、『日本労働運動資料』における明治期から大正中期に至るまでの資料を主要なデータとして、また他の領域との関連を見るために、大正中期については『新聞集成 大正編年史』をも用いる。具体的な考察時期としては、①一九〇〇年前後、②明治末期から大正初期、③一九二〇年前後、の三つを取り

上げる。

① 一八九八(明治三一)年、注目を浴びた労働争議として日本鉄道機関方同盟罷工がある。ここで機関方が要求したことは、「待遇」の改善であった。当時労働者は、世間から道徳性が低いと見られていて、「労働者の品位を高むる」必要が叫ばれていた。ただし、機関方は労働者階級の一員という意識はなく、むしろ身分的な名誉を求めている。

② 明治末期から大正初期にかけての労働運動においては、労働者の「人格」の尊重が唱えられたことが、ひとつの特徴をなしている。T・C・スミスが言うように、この時期初めて「人格」概念が導入されることによって、労働者にとって「道徳的平等」を主張することが妥当なことになった。ただし、これを主張したのは、一部の知的エリート(労働運動指導者や新聞など)に限られていた。

③ 一九二〇年前後には、第一次世界大戦に伴う大戦景気——成金が多く出現した——で、労働者の間に「公平」な分配を求める動きが現れ、労働者の人格を尊重しようとする流れがより強まった。この流れは一部の知的エリートに限らず、労働運動の平メンバーをも含むものであった。この時期は、普通選挙を求める普通選挙や全国水平社創立などの動きとも重なり、「人格」および「入権」の承認を求める運動が広範囲に起こったことを示している。また教育の分野では、高等教育の拡大などにより、個人の人権承認と機会均等とがクローズ・アップされてくることになった。

以上のように、一九〇〇年前後から一九二〇年前後にかけて、何が「公平」かについての基準が、より平等主義的な方向に転換していった。「公平」をめぐる闘争は、労働問題においても、そ

れ以外の領域においても平行して、人間らしい待遇、すなわち個人への「人格」の承認を争点としていた。

さらに注目したいのは、普通選挙のように選挙権という法的な「権利」を求める運動に先立って、「道徳的平等」を含蓄する「人格」の承認を求める動きがあったことである。つまり「権利主体」が成立する前に、「道徳の担い手」として個人の「人格」の承認を求める動きが現れたのであった。